



大屋富士

伸びよ 豊かに たくましく

令和6年10月10日
養父市立大屋中学校
学校だより 第6号
Tel 079-669-0111

10月に入り、ようやく秋めいてまいりました。1年で一番長い学期である2学期は、1学期の学びを更に深化させる学期といえます。たくさんの行事の中、人とのかかわりの中で、多くのことを吸収できる場があり、自己を表現していく多くの場があります。

学校における体験的な活動は、準備から当日に至るまで多くの時間を費やします。行事の精選が謳われる中、それでも実施方法に工夫を加えていきながら、行事や体験活動を実施しています。「生きる力」を身に付けていくためにもそこには大きな学びがあります。

今後、子どもたちの未来がメタバースと呼ばれるような仮想空間での生活が主となるようなものとなったとしても、根本には人としての生活の営みがそこにはあります。自身が経験した触った感触であったり、匂いだったり、体温だったり、音色だったり、さらには汗をかいたり、笑ったり、怒ったり。必ず人が感じたもの、体験したものがベースとなるはずで、無機質なデジタルな世界が訪れても、アナログな経験を積み上げているものは強いと私は思っています。10月からも教科の学習と同様、体験的な活動にもしっかりと取り組んでいきます。



先日の全校集会で彼岸花の話をしてしました。毎年、彼岸の頃にはちゃんとあぜに彼岸花が咲き誇り、やはり名のおり「彼岸花」だと思っていたのですが、さすがにこの暑さのため、今年の開花は10月に入ってからになりました。

他の草花と違い、彼岸花は本当に立派な花を咲かせることに小さい頃から感心していました。彼岸花が咲いているとき、そこに葉は見当たりません。によきによきと茎を伸ばし、花だけが咲いています。改めて見ると何とも奇妙な花です。彼岸花の葉は、花を咲き終えた後、地中から出てきます。他の草花が枯れてしまう冬に、にらのような葉を青々と茂らせ、他の植物に邪魔されることなく太陽光を独り占めして、たっぷりと光合成を行うのです。多分、冬場に葉をみてもそれが彼岸花とは気づかない人が多いのではないのでしょうか。彼岸花には地方によっていろんな名前があり、曼珠沙華や狐花などたくさん名前があります。花と葉が時期を変えて現れることから「葉見ず花見ず」という名前もあります。



彼岸花は他の植物が休んでいる冬場に、たっぷり栄養を蓄えるからあんなにきらびやかな花を付けられるのでしょう。この2学期、しっかりと花を咲かせた後は、彼岸花のように次のステージに向かってしっかりと力を蓄えていってほしいと願います。

体育祭

9月14日（土）大屋中学校体育祭が開催されました。天気にも恵まれ、保護者の皆様、地域の皆様に大屋中学校全校生の一生懸命な姿をご覧いただけたのではないかと思います。例年よりも開催時期を遅く設定したにもかかわらず、当日の気温は高く、競技に熱中する生徒たちの体調を心配しておりましたが、生徒たちは見事にやり直し、すばらしい体育祭を創りあげてくれました。



木彫フォークアートおおや

9月26日（木）本年度も大屋ホールで開催された木彫フォークアートおおやに各学年、参加させていただきました。作品から伝わってくる木の優しさや、温もりを感じる数々の作品を生徒たちはメモをとりながらじっくりと鑑賞しました。



青谿書院訪問

9月25日（水）1年生が青谿書院を訪問しました。西村様に池田草庵先生の生い立ちや教えについて教えていただきました。実際に青谿書院を訪れ、そうあんくんの日や草庵先生が残された数々の教えを身近に感じる事が出来る訪問となりました。



マラソン大会

10月2日（水）
秋晴れの中、マラソン大会を行いました。マラソン大会は生徒にとって心待ちにしていたり、憂鬱な気分を迎えたりするものです。記録を目指すもの、なんとか自分に課した完走を目指すもの、ゴールに向け、必死になって走りぬけた生徒一人ひとりが輝いて見え、また一つ、貴重な体験ができたのだと思いました。



先輩と考える私たちの未来

京都大学名誉教授 京都大学メディカルイノベーションセンター特任教授 中尾 一和先生
八鹿病院院長、滋賀医科大学名誉教授 西村 正樹先生

養父市の先輩、大屋の先輩となる両先生にご来校いただき、先生方が医学の道、科学の道に進まれたきっかけや中学時代の夢、研究に対する思いなどお話し

いただきました。養父市から羽ばたかれた先輩方のお話は、未来の自分に夢広がるお話でした。

